

ヨハネの手紙第一

§2 救いに関する3つの検証(2:3-29)[その1]

前回の復習

1. 手紙の著者はヨハネである。
2. ヨハネは、誤った異端の教えによる教会内の分裂に悩まされていた信者たちを励ますために、この手紙を書いた。
3. 真の信者であれば、光の中を歩むはずである。なぜなら、彼はイエス・キリストを信じたことにより、「罪と死の原理」からは解放されているからである（ロマ 8:2）。だから、私たちは罪を犯さないようになるべきである。
4. 同時に、真の信者であれば、罪を犯す可能性があることも認めているはずである。信者は罪を犯したときに神との交わりが断たれるが、御前で自分の罪を言い表すことで赦しを受けることができる。
5. また、イエスご自身が父なる神の御前で私たちを弁護してくださっている。

§2について

1. 2:3 から、読者に救いの確信を与えるため、ヨハネは信者の救いに関する検証を始める。
2. それらの検証は以下の3つである。
 - (1) 道徳的検証：神の命令を守っているかどうか（義の道を歩んでいるかどうか）
 - (2) 社会的検証：兄弟姉妹同士の交わりを保ち、互いに愛し合っているかどうか。
 - (3) 神学的検証：イエスが神、人となって来たキリストだと信じているかどうか。
3. 筆者の見解では、2章では2:3-6が道徳的検証、2:7-17が社会的検証、2:18-29が神学的検証となっている。
4. この手紙のこれ以降の部分は、3つの検証の詳しい説明と適用が書かれている¹。

¹ ジョン・R・W・ストット『ティンデル聖書注解 ヨハネの手紙』千田俊昭訳（いのちのことば社、2007年）99頁

§ 2 救いに関する3つの検証(2:3-29)[その1]

1. 道徳的検証:従順(2:3-6)

2:3 もし、私たちが神の命令を守るなら、それによって、私たちは神を知っていることがわかります。

2:4 神を知っていると言いながら、その命令を守らない者は、偽り者であり、真理はその人のうちがありません。

1. 信者が神を知っているのだということは、その人が神の命令を守っているかどうかでわかる。
 - (1) ここでの「知る」「わかる」と訳されているギリシャ語の言葉 (*ginōskō*) は、何かを経験的／体験的に知るようになる、という意味である。
 - (2) 私たちはイエス・キリストを信じたことによって救われ、神を経験的に知っている。
 - (3) 私たちは神の命令を守ることによって、神を知っているのだということを体験的に理解していく。
2. 私たちが守るべき「神の命令」とは何か。
 - (1) 原文では「神」という言葉はなく、「彼の命令」と言われている。よって、「イエスの命令」と読むこともできる（どちらも同じことである）。
 - (2) また、「命令」は複数形である。つまり、「神の諸々の命令」もしくは「イエスの諸々の命令」と訳することができる。
 - (3) イエスは「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」という「新しい掟」を与えられた（ヨハ 13:34 ; 15:12）。
 - (4) 新約聖書の諸々の手紙ではいくつもの命令が与えられている。それらの命令は主の御霊を通して与えられたものである。
 - (5) ガラテヤ人への手紙 6:2
互いの重荷を負い合い、そのようにしてキリストの律法を全うしなさい。
 - (6) 私たちが守るべき「神の命令」は、すべて「互いに愛し合いなさい」というイエスの「新しい掟」に集約される。
3. 神の命令を「守る」とはどういうことか。
 - (1) 元のギリシャ語には「注意深く、目を離さないで従う」という意味合いがある。
 - (2) この単語は例として、「船乗りが風の吹く方向や海の流れを注意深く観察し、それらの

方向に従っていく」というような場合に使われる²。

- (3) また、原文からは「神の命令を守り続ける」と訳すことも出来る。
- (4) 神の命令に、注意深く・目を離さないで従い続けることによって、私たちは神を知っているのだということを体験的に理解していく。

- 4. 私たちは罪を犯す可能性があることをもう一度思い出す必要がある。
 - (1) クリスマンは本質的に罪とは無関係になった。しかし、信者でも罪を犯す可能性がある。聖書は（そして、ヨハネは）この両方が真実だと教えている。
 - (2) 罪によって神との交わりが不完全になってしまったとき、聖霊が促す通りに罪を認め、神の御前に言い表すならば赦される（1:9）。これに従うこともまた、神の命令に注意深く・目を離さないで従うことである。
 - (3) 同時に、私たちは罪を犯さないようになることを目標にすべきである（2:1）。また、そのような姿に変えていただけるよう、期待すべきである（ロマ 12:1-2 参照）。
 - (4) ヨハネが言っている意味は、神の命令を完全に守った人ということではなく（そのような人は世界中のどこにもいない）、弱さを持った人間ではあるが、精いっぱい神に従って生きようとしている人のことである。（カルヴァン）³
- 5. 異端者たちは「神を知っていると言いながら、その命令を守らない者」であった。
 - (1) 原文からは、「既に神を知っていると言いながら、その命令を守らないことを続ける者」と読むことができる。
 - (2) クリスマンも罪を犯してしまうが、彼らは神の命令を守ることを拒否し続けていた。
 - (3) 彼らは「偽り者」である。イエスはこの言葉を悪魔に対して使っている（ヨハ 8:44）。異端者たちの「偽り」の性質は、まさにサタンの性質そのものである。
- 6. 3-4 節から学ぶクリスマンの姿勢
 - (1) クリスマンは本質的には罪から解放されたのだと認めた上で、従順が真の信仰の証明になるということを心に留めて歩むべきである。
 - (2) 聖霊なる神は、そのような歩みを実行させる力を持っておられる。
 - (3) 神を知っている者は神の御力に希望を持ち、その信仰は従順を生み出し、その従順によってクリスマンは「自分は救われている」という確証を得ることができる。

² Robert Law, *The Tests of Life: A Study of the First Epistle of St. John* (Edinburgh: T. & T. Clark, 1909), p. 211.

³ ストット『ヨハネの手紙』101頁

2:5 しかし、みことばを守っている者なら、その人のうちには、確かに神の愛が全うされているのです。それによって、私たちが神のうちにいることがわかります。

2:6 神のうちにとどまっていると言う者は、自分でもキリストが歩まれたように歩まなければなりません。

1. 今度は「神の命令」ではなく「みことば」を守ることが強調されている。
 - (1) みことばは命令だけではなく、神の諸々の約束（契約）も含んでいる。
 - (2) また、みことばには神が光であり愛であるというご性質が現されている。
 - (3) 神のご性質を伝えるメッセージ（ことば）が受肉された方がイエスである。
 - (4) みことばを守る（目を離さないで従う）ということは、聖書全体から目を離さないで従うということである。
 - (5) また、「ことば」であるキリストが歩まれたように歩むことである。

2. 「神の愛が全うされる」とはどういうことか。
 - (1) 神の愛が信者の内で完全になるという意味で読むことができる。
 - (2) また、信者の神への愛が完全になるという意味でも読むことができる。
 - (3) この「愛」（アガペ）は神の無制限の愛であり、人間の力で実行することはできない。愛である神ご自身、クリスチャンの内に住まわれる聖霊の御力によって可能になる。

3. 5-6節は以下の2つの確証を与えてくれる。
 - (1) クリスチャンは御言葉に従順であることによって、その内で神の愛が全うされる。
 - (2) 神の愛が全うされることで、私たちは神の内（＝キリストの内）におり、永遠のいのちを得ているのだとわかる。

2. 社会的検証: 愛(2:7-17)

2-1. 愛の命令 (2:7-11)

2:7 愛する者たち。私はあなたがたに新しい命令を書いているではありません。むしろ、これはあなたがたが初めから持っていた古い命令です。その古い命令とは、あなたがたがすでに聞いている、みことばのことです。

2:8 しかし、私は新しい命令としてあなたがたに書き送ります。これはキリストにおいて真理であり、あなたがたにとっても真理です。なぜなら、やみが消え去り、まことの光がすでに輝いているからです。

1. ヨハネはテーマを「互いに愛し合うこと」（教会における兄弟姉妹同士の愛）に移している。
 - (1) これは、神の命令の中で最も重要である。
 - (2) ヨハネの福音書の中で、イエスはこの命令を3度も繰り返している（13:34；15:12、17）。これこそがイエスの「新しい戒め」である。

2. 「互いに愛し合いなさい」という命令は「古い命令」である。
 - (1) この手紙が書かれた時点で、イエスの十字架と復活から40年以上が経過していた。そういう意味で、読者たちにとってイエスの「新しい戒め」は古い命令である。
 - (2) また、愛の命令は旧約聖書でも教えられているという意味で、古い命令である。
 - (3) レビ記 19:18
復讐してはならない。あなたの国の人々を恨んではならない。あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい。わたしは【主】である。
 - (4) イエスは「律法の中で、たいせつな戒め」の一つとしてレビ記 19:18 を引用された（マタ 22:35-40；マコ 12:28-34）。律法学者もそれに同意した（マコ 12:32-33）。
 - (5) イエス時代のユダヤ教でも、愛の実践は重要な教えであった。
 - (6) 使徒たちの教えはイエスから受けたものであり、旧約聖書の伝統をも受け継いだものである。異端が教えるような新しい教えとは異なっている⁴。

3. 「互いに愛し合いなさい」という命令は「新しい命令」である。
 - (1) イエスは「新しい掟」としてこの命令を与えられた。レビ記 19:18 の命令とは「わたしがあなたがたを愛したように」という部分が異なっている。
 - (2) 今や、愛である神ご自身が来られ、人として愛の模範を示してくださった。私たちが行うべき愛の基準は「イエスが愛したように愛する」ということにある。
 - (3) 愛を行うことは、いつでも新鮮な経験である。そのような意味で、この命令は常に新しい。
 - (4) 今はイエスが既に来られ、生きておられ、私たちと共におられる、「まことの光がすでに輝いている」新しい時代である（ロマ 13:11-13；II コリ 3:6；5:17；6:2）。
 - (5) 「新しい掟」は2,000年近く前にイエスによって与えられたが、イエスと共に現れた新しい時代の命令なので、依然として「新しい掟」と言うことができる⁵。

⁴ ストット『ヨハネの手紙』103-4頁

⁵ D・M・スミス『現代聖書注解 ヨハネの手紙 1、2、3』新免貢訳（日本基督教団出版局、1994年）101頁

2:9 光の中にいると言いながら、兄弟を憎んでいる者は、今もなお、やみの中にいるのです。

1. 「兄弟」とは誰か。
 - (1) 兄弟とは、自分と同じくイエスにある信仰を持っているクリスチャンのことである。使徒の働き 9:30；10:23；11:29；テサロニケ人への手紙第一 4:10；5:26；ペテロの手紙第一 2:17；5:9 参照。
 - (2) イエスにある信仰を持つクリスチャン同士は、所属する教会が異なっても、同じイエス・キリストの体に属する兄弟姉妹である（I コリ 6:15a；12:12-26；エペ 1:23）。
 - (3) 私たちはたとえ所属教会が異なっても、イエスの体に属する器官として、イエスの愛を持って互いに愛し合うべきである。
 - (4) 「もし信者が彼の兄弟を愛することができなければ、彼が隣人を愛することができるかどうかは疑わしい。」⁶

2. 「兄弟を憎んでいる者は、今もなお、やみの中にいるのです。」
 - (1) 今や、イエスの愛が示され、時代が移り変わり、またクリスチャンは皆同じイエスの体に属しているのだということが明らかにされた。
 - (2) だからこそ、「光の中にいる」信者同士が互いに愛し合うことは当然である。
 - (3) しかし、異端者たちは兄弟を憎んでいた。
 - (4) G. W. Barker 「憎しみとは愛の実践の欠如である。……兄弟が必要としていながらも助けを与えない時はいつでも、その者は兄弟を軽蔑し、事実憎んでいるのである。」⁷
 - (5) B. F. Westcott 「無関心は不可能である。」⁸
 - (6) 「光の中にいる」かどうかは、イエス・キリストを信じて受け入れているかどうかにかかっている。だから、人は光に属しているか闇に属しているかの選択肢しかない（ルカ 11:23 参照）。

2:10 兄弟を愛する者は、光の中にとどまり、つまづくことはありません。

2:11 兄弟を憎む者は、やみの中におり、やみの中を歩んでいるのであって、自分がどこへ行くのか知らないのです。やみが彼の目を見えなくしたからです。

⁶ Glenn W. Barker, *1 John, Expositor's Bible Commentary*, vol. 12, Frank E. Gaebelein, ed. (Grand Rapids, MI: Zondervan, 1981), p. 317.

⁷ Ibid.

⁸ Brooke Foss Westcott, *The Epistles of St John: The Greek Text with Notes and Essays*, 3rd ed. (Cambridge and London: Macmillan and Co., 1892), p. 55.

1. 互いに愛し合う者は、光の中にとどまっている。
 - (1) 私たちが神の愛をもって互いに愛し合うことは、愛なる神ご自身が私たちの内にいて、御力を与えてくださることが前提である (Iヨハ 4:7、10、13、15、16)。
 - (2) しかし、愛を实践することによって、私たちは自分たちが光の中にいるのだと体験的に理解することができる。

2. 光の中にいる者は、つまづくことがない。
 - (1) 新共同訳「**兄弟を愛する人は、いつも光の中におり、その人にはつまずきがありません。**」
 - (2) この箇所は原文ではとても曖昧であり、いくつもの解釈が可能である。
 - (3) 「その人にはつまずきがありません」は「その光にはつまずきがありません」と読むこともできる。
 - (4) 光に照らされている中を歩むクリスチャンは、つまづくことなく歩むことができる。その人がつまづくことなく歩む姿を見る者は、つまずかずに歩む道を学ぶ。
 - (5) 光の中を歩むクリスチャン同士は、お互いに罪を避け、愛し合うことを学ぶ。

3. 闇に属している者は、自分がどこへ行くのかを知らない。
 - (1) 闇に属している者たちは「何につまづくかを知らない」(箴 4:19)。
 - (2) 私たちは、異端者も、そもそも信仰を持っていない人も、誰をも愛すべきである。
 - (3) しかし、彼らの偽りの教えや価値観に同意したり、惑わされたりする必要はない(ロマ 12:2a)。
 - (4) 彼らの言動に分かりやすい「憎しみ」が見られなくても、彼らは闇の中におり、「自分がどこへ行くのかを知らない」のである。

4. クリスチャンの責務
 - (1) 私たちが互いに愛し合っているならば、自分たちを「世の光」としてクリスチャンではない人々にも示していくべきである。
 - (2) 既に神の愛、光なる神を知った者の責務は、その光を示し、愛を伝えていくことである。
 - (3) 信者が互いに愛し合うことは、私たちの救いを確信させる。
 - (4) 信者が互いに愛し合うことは、私たちに伝道の必要性を認識させる。
 - (5) 信者が互いに愛し合うことは、伝道していく上での証となる。

まとめ

- ・ クリスマンは、信仰により、恵みによって救われた（エペ2:8）。
- ・ クリスマンは、聖書の言葉から目を離さずに従っていくことで「自分は神を知っている」ということを体験的に理解していく。
- ・ クリスマンが実践すべき最大の「神の命令」は、「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」というイエスの命令である。
- ・ 互いに愛し合うことは、古い命令であり、新しい命令である。
- ・ 従順に愛を実践する者は、光の中を歩んでいるため、つまづくことはない。
- ・ 以上のように神の愛を体験的に理解した者には、まだ闇に属している人々に、その愛を伝えていくという役割がある。